

「絶望」と「キラキラ」のあいだ

増田祥世



はじめまして。北海道長沼町で農業を営んでいる増田と申します。今回から四回にわたりこのコーナーを担当させていただくことになりましたので、よろしくお願いたします。

私は結婚してすぐに家族と一緒に農作業を始めましたが、その後三年間は育児に専念していました。この四月から息子が幼稚園に入園するの

で、そろそろ自分も畑仕事に復帰しようかというところです。わが家では二月の下旬からそのシーズンの仕事が始まるのですが、現在（三月中旬）は息子と一緒にハウスで義母がトマトやナスの種まきをしているのを手伝ったり（邪魔したり？）しています。



私が農家になったきっかけは長沼町と長沼町農協が主催していた農業者との婚活パーティーで夫と出会ったことでした。



私が参加したパーティーは札幌のホテルが会場で、四人掛けのテーブルに男女が二名ずつ座って食事をしながらお話をし（少し時間が経ったら男性が次のテーブルに移動する）、最後に気になった人の名前を書いて投票し相手も自分を選んでくれていれば、無事カップル成立、というものでした。私は当時結婚に一度失敗していて（そのときは恋愛結婚）、自分の「この人が好き！」みたいな気持ちはまったくアテにならないと薄々感じていたので、相手にときめきを感じるかと

増田祥世さん

1979年東京生まれ。

大学院で農協女性部や女性農業者をテーマに研究しているうちに、気がつけば自分も農家の女性に。

8 ha程の農地で露地ではブロッコリーとタマネギ、ハウスではトマト、ピーマンなど少量多品目の野菜を栽培している。

夫ともうすぐ3歳になる息子、夫の両親の5人暮らし。



うかよりもとにかく、真面目で穏やかで変なクセ（ギャンブルとか）がなさそうな人ならそれで十分、という気持ちで参加していたのですが、正直なところ、少し話ただけでは相手のことなどお互いによくわかりません。しかしこの会場には「世話焼き婆」ならぬ「世話焼きおじさん」がいて、五十代くらいのその方も参加者だったのですが、何回もそのパーティーに参加しているというその男性は「もう自分のことはあきらめたからさ〜」

と言って、ほかの参加者について「この人はきっちりした経営するヨ！」とか「この人は頭いいからいろんなこと挑戦するけどネ、お金はないヨ！」とか一回会っただけではわからないような情報をいろいろと教えてくれるのでした。そんな世話焼きおじさんの夫への評価は「この人はね、マジメだよ〜、とにかくマジメ〜」というもので、おじさんのアドバースと話したときの印象から夫の名前を

書いて投票したところ、有難いことに夫も私を選んでくれていて、無事にカップル成立となりました。

こうして生まれて初めて農業者とお付き合いをするようになったのですが、夫は典型的な昔ながらの農家の男性なのか、農業の話はするけれど、それ以外はおそろしく口下手であり女性と二人で出かけることにも慣れていないタイプ。何度か会ってもいつも話題を振るのは私ばかりで、夫がそれに対して二言、三言答えて会話終了となることが多く、いくら真面目で悪い人ではないとは言え、だんだん会つのがつらくなって来ました。そんなある日また夫と会うことになったので、「今日は絶対に私からは会話を振らない！」と心に決めてデートに臨んだところ、黙っ〜たままご飯を食べて、黙っ〜たまま駅に向かって、黙っ〜たまま解散：となりそうだったので、どうとうしびれを切らした私が「なんかしゃべって！」

と迫ったところ、夫はものすごく困った顔をして、たまたまガソリンスタンドの前だったので、ガソリンスタンドの看板をじーっと見て、長い長い沈黙の後、ぼそっと一言「…最近、ガソリン入れましたか?」と言ったのでした。地獄のような沈黙の後でやっと夫が絞り出した話題がガソリンのことだったので、私は心の中でズコーッ!!と盛大にコケてしまったのですが、一周回ってそれが面白くなっ
てしまい、結局結婚までたどり着くこととなりました(ちなみに夫の名誉のために付け加えると、今では普通に会話もします。そして、農家にとってガソリン(燃料)の話はわりとよく出てくる話題のようです)。

こうして農家になって五年ほど経ちましたが、今でも農家以外の方には農家＝大変というイメージが強いらしく、私が農家だとわかると「大変ですね…」とか

「えらいね!」と言われることがよくあります。息子を出産した時も、私が出産の痛みが怖くて怯えていたところ看護師さんに「あなたは普段から農業という他の人が大変で出来ないような仕事をしているんだから、出産なんてそれに比べたらなんてことないから大丈夫!」と、他の職種の妊婦さんにはおそろしくないであろう励まし方をされ、「イヤイヤ、農業べつに痛くないし!」と内心思ったこともありました。

農家のなかでも、とくに夫の両親と同居して農業に従事するいわゆる「農家の嫁」(私もそうですが)はいばらの道と思われているようで、「自分なら絶対無理!」



と言われることもあります。たしかに昔前の農家の嫁は夫や夫の両親によく仕え、跡継ぎを産んでこそ一人前、と思われていた時代もありました。以前農家のお嫁さんの日記が本になったものを読んでいたら、お姑さんがあまりに用事を言いつけてくるので走って逃げたら、お姑さんも隣を全速力で走りながら用事を言いつけてきた、という記述があつて笑い事じゃないけれど笑ってしまったこともあります。今では時代も変わり、農家の嫁の環境はもつとずつとよくなっていると思うのですが、もちろん農家や同居の苦労がゼロになったわけではないので、農家の女性の中にも「結婚する前は農作業をしなくていいと言われたのに、結局畑仕事をさせられている。だまされた!」とか「農家でしかも同居なんて人生おしまい!」と後悔している人たちもいます。メディア等ではこうした女性たちが悲観的に取り上げられることも多く、それが

昔ながらの農家のイメージが根強く残る一因になっているのかもしれない。

一方、対極的な存在としてこちらも最近メディア等で注目されるようになってきているのが、新しい働き方や生き方を実践している農家の女性たちです。彼女たちはSNSで自分の農業を発信してビジネスを展開したり、女性ならではの感性を活かした会社を立ち上げてこれまでになかった商品を開発したりしています。どんな立場であっても、自分の行動力とアイデア次第で輝けるという新しい農家女性像のモデルとして農家女性を対象とする研修会等に講師として招かれることも多いようです。農水省でも二〇一三年から「農業女子プロジェクト」というものを立ち上げ、こうした女性たちを支援し、農業を魅力的な職業のひとつとして若い世代の女性に提案する取り組みを行っています。

しかし、私も一応農家の女性の端くれ

として思うのは、こうした農家になって絶望している女性たちとキラキラしている女性たちのあいだにはこのどちらでもない「普通」の女性たちがかなり分厚い層として存在しているのではないか、ということです。

「普通」の定義は難しいですが、とくに特別なことはしていないけれど人生終わったと思っているわけでもなく、農家になって大変なこともあるけれどいいこともあって、それなりに今の生活に満足している、そんなイメージでしょうか。自分を含め、周りを見てもそんな女性が案外多いと思うのですが、普通の女性は話題性やインパクトに欠けるためかメディアなどで取り上げられることはほとんどなく、その実態はあまり知られていない気がします。

そんなわけで、このエッセイでは私のような何の変哲もないほんとうに普通の



農家の女性の日常を皆さんにお伝えしていこうと思っています。果たして普通の農家の女性の生活に興味がある人がいるのか？という根本的な疑問はありますが、「普通」の農家を知ること、農家の生活というものをより深くご理解いただけるのではないのでしょうか。この連載を通じて「普通」の世界もなかなか豊かで悪くないということや、農家の嫁の生活も意外と楽しそうだと、ということを知っていただけたら嬉しいです。それでは一年間、どうぞよろしくお願いいたします。